

東京日々新聞

九百九十二号



其所も幽天とてまか化て台
 ま脚崎明神と腹と立て人々
 取ら殺す十九日ま伊世の因
 ぞ神朝の鳴るのへらの音も
 を成たを録るう續け
 玉は怪談なり書て由
 田朝のら小言が来る智知
 ら多分併し此様る事も出
 一て置ら世間の者
 の夢の醒るの思ふ
 むらうや又妙なる味一と
 記しす是は武蔵初秩父郡の上田野村の清太郎の
 娘かたねと云ふ女がわの夜近所へ湯へ入る風と内と出
 けいさ帰ぞ来ぬも多父大心配一親類も怨言と傳はて
 近村まも三日の間残る時を尋ね探してをとも一向へ行方が知せず
 一同心配して居たり廿日の夜深まきうて忽ち清太郎前の山を怪しき
 声々聞ゆも多近所の者も打ち連さく山へ舞登りて見ると大木の茂りたる
 中まおねの髪のもを揮り札一六尺ありてあま青竹と林のま我の深岐の
 金毘羅多かりおねと同道て日光より高峰を原へ登りて来て何れ来年の
 三月十七日あり又おねと連て日光へ来るへ一と云ふと思へば

夫まありま金毘羅ま
 上られ玉ひて夢の醒ると
 如くありしと是も前
 号に記したる長
 例小月村のおすま
 稲荷の類も知を
 ませぬ

陰見之屋 渡辺彫米

芳幾


8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9

